

京林大だより

No.51



絵：卒業生 熊走君



来たれ大学校へ

オープンキャンパス開催！



8月1日（土）、林業大学校の「オープンキャンパス2020」を開催したところ、約40名（保護者含む）の参加を得ることができました。

今年はコロナ禍での開催ということで、例年は一日かけて行うオープンキャンパスを感染症予防のため、密を避けるなどの対策を行なった上で、午前・午後の二部制にしての実施としました。

当日は只木校長の歓迎のあいさつから始まり、学校概要説明、チェーンソーによる丸太切り・高性能林業機械（フォワーダ、ハーベスタ）の実演と参加者による操作体験、個別相談会などを行いました。機械実演や個別相談会には多くの在校生も積極的に協力してくれて、スムーズに進めることができました。

今回は時間を短縮した日程のため、慌ただしいスケジュールになりましたが、参加された方には、学校を知ってもらい、体験を通して興味を持っていただけたのではないかと思います。とくに個別相談会では、学生生活やアルバイト、住宅面など様々な疑問にもこたえることができました。

また、オープンキャンパスに参加できなかった方のために、8月中毎週土曜日に「学校説明会」をおこなったところ17名の参加がありました。

今年はきびしい猛暑の中での開催となりましたが、たくさんの方の参加をいただきありがとうございました。

多くの方が京林大に入学されるのを心よりお待ちしております。



オープンキャンパス会場の様子



シュミレーターによるハーベスタ体験



在校生による操作指導

林政ニュース

『特殊伐採』

個人の庭や神社境内などにある木が枯れてしまったり、大きくなりすぎて管理ができなくなってしまった。伐採したいが、根元から伐り倒すと周りの建物などに当たって大きな被害が出る恐れがある。

このような場合に必要になるのが『特殊伐採』技術です。進入路がある場合は高所作業車などの機械を入れ、先端に近い部分から少しずつ伐り、伐採した枝や幹はクレーンなども使って安全に地面に下ろしていきます。

しかし、進入路がなく高所作業車などの機械が入ることができない場合は「人の力」のみで伐採を進める必要があります。この時必要になるのが「ロープワーククライミング」による安全な木登り、伐採した枝などを地面まで危険なく下ろす技術になります。

木登りによる伐採は、高所での作業となるため様々な知識と高度な技術が必要ではありますが、近年は戦後植栽し大きく育ってきた木が台風による強風などの影響で周りに被害をもたらす、また被害を与えそうなケースが増えており、『特殊伐採』の需要もそれに伴い増えているようです。

今月の授業参観

『特別研修2 ツリークライミング』

新たな試みとして「ツリークライミング」体験を授業に取り入れてみました。「ツリークライミング」と言うとレクリエーションの分類になりますが、左記の「特殊伐採」を実施する上で基盤となる技術です。

「特殊伐採」は進入路のないところで実施されることが多いため、切った材を搬出・利用がしにくいことから、いわゆる「林業」とは言いにくいかもしれませんが、需要が高まる中で、仕事の選択肢の一つとして認知する機会になればと考えています。実習の中でも、樹上の枝を切ってロープで吊り下げて安全に下ろすという「特殊伐採」作業の一端を見せていただくこともできました。

高い所が苦手と言っていた学生も樹上まで上がることができ、普段のタイトな授業日程の中でも、笑顔で楽しく実習できた一日となりました。



校長室より

文化を生むのは「余裕・遊び」

校長 只木良也

先日、8月18日付朝日、天声人語に以下の記事。ホモ・サピエンスは、知恵ある動物、ヒトを表すラテン語。これに対して、オランダの歴史家ホイジンガは、ホモ・ルーデンス(遊ぶ人)の語を用い「遊び」が文化を生んだ、宗教的祭祀・音楽・文学・哲学でも、元々は遊びの要素が大きいと考えたとか。そして、天声人語は、「遊び」は経済にとっても大きな要素で、今年4-6月のGDP(国内総生産)が戦後最低になったのは、新型コロナ過で、「遊び」活動が禁止・自粛になったことの影響が大きい、と論究しています。

この記事を見て、昔読んだ本を思い出しました。人間社会では食うのに精一杯の時期には文化は生まれません。ある程度の「余裕」があるところに文化は生まれてくるのでした。生まれた文化を守り育てるためには、更に「余裕」が必要で、それを

求めて人間社会は発達してきました。同感です。

さて、そのそうした文化進展の一つの指標は人口増加でした。そこには当然「競争社会」が生じます。それを「和らげてくれる」自然のシステムが疫病であったという見方もあります。天然痘・はしか・コレラ・インフルエンザ・ペスト・・・、今回のコロナウイルスなど、こうした病気は元々特定の地域の風土病でしたが、文明社会の発展・人口増加と、地域交流拡大により、全地球的規模に拡大し、世界的に流行するようになった、と考えられています。なお「疫病」の「疫」の文字の意味は古典では「民が皆病むなり」だとか。

そして、疫病退散を願っての宗教的イベントも「余裕・遊び」の産物でした。京都の夏を彩る祇園祭山鉾巡行も大文字送り火も、起原は疫病退散を願ってのものらしいのですが、今年はコロナ過で、三密回避のため中止・規模縮小となってしまいました。なんとなく本末転倒感ありです。